

北 欧 の イ ン ド 学

原 實

1985年9月19日より8週間にわたり、筆者はCentralinstitut for Nordisk Asienforskning (The Scandinavian Institute of Asian Studies, 通常CINAと略称される)の招請により、北欧4国の7都市、Copenhagen, Oslo, Göteborg, Stockholm, Uppsala, Helsinki, Lundを訪れ、各地の大学に於いて学者、研究者と懇談する機会を得た。因みにCINAとは北欧5ヶ国の政府により、北欧諸国の東洋学推進のため1967年設立され、本部をCopenhagenに置くが、1980年より新企画を組んで一年に2名の学者をアジアより招いて国際的学術交流に道を拓いた。インド学の分野に於いても過去R. N. Dandekar (1980), K. K. Raja (1984)の両氏がこの企画によって訪欧している。ここに「北欧のインド学」として一稿を草する所以のものは今回の訪欧を可能ならしめたS. Egerod 所長以下のCINA関係者各位、就中P. Sørensen, K.-R. Hællquist 博士、並びに各地に於いて筆者のために格別の便宜をはかれたI. Fišer, G. von Simson, F. Josephson, S. Lienhard, P. Schalk, A. Parpola, T. Olsson 諸教授に感謝の微意を表せんとするものに他ならない。但し、紙数の都合上、研究史の詳細を網羅することはもとより不可能で、次下に記するところは唯単なる概観にすぎない。稿を草するに当って、E. Windisch, *Geschichte der Sanskrit Philologie und indischen Altertumskunde* (Strassburg 1917), P. Aalto, *Oriental Studies in Finland 1828-1918* (Helsinki 1971)の名著の他、A. Parpola, "Sanskrit Studies in Scandinavia," *International Sanskrit Conference*, ed., by V. Raghavan Vol. 1, Part II, pp. 632-648 (New Delhi 1979), Ch. Lindtner, "Sanskrit Studies in Denmark" (未発表原稿)を随時参照した。P. Aaltoの名著は湯山明博士より貸与を受け、又細部についてUppsalaのGunilla Gren-Eklund 博士とGöteborgのF. Josephson 教授に資料の提供を仰いだ。特に記して感謝の意を表する。

叙述の原則として現在活躍している学者の業績を中心とし、その主要著作が註に列挙されるよう仕組んだから、それ以外の学者の業績は本文中に

随時言及・紹介される形をとっている。

Denmark

Denmark のインド学は印欧語比較言語学（以下 IE と略す）の揺籃期にその卓れた貢献によって知られる Rasmus K. Rask (1787-1832) に溯る。彼は1816-1823の間にペルシャ、インド各地を旅行して大量の Pāli, Sinhalese 写本を故国に齎した。その請来写本は現在も Copenhagen の王立図書館 (Royal Library) に蔵置され、その目録作製には故 C. E. Godakumbura, H. Bechert, H. Braun, Frede Møller-Kristensen 等が参加している。⁽¹⁾

Rask に次いで N. L. Westergaard (1815-1878) もインド、ペルシャに旅行した (1841-1844)。彼は Bonn, Paris, Oxford に学んで東洋学を修めたが、1845年 Copenhagen 大学のインド並びに東洋諸語文献学の初代教授に任ぜられた。彼はインド土着文法、辞書学研究に貢献したが、又 Aśoka 王碑文、Avesta の研究にも従事し、広くインド文化を紹介して Denmark インド学の礎石を築いた。⁽²⁾

1878年 Westergaard 歿するや、教授職はその五弟子、E. Brandes, L. F. A. Wimmer, V. Thomsen, S. Sørensen, V. Fausbøll に公開されたが、結局 Fausbøll (1821-1908) が師の跡を襲うこととなった。彼は1855年既に Dhammapada の批判的出版によって令名を馳せ、更に Jātaka 6巻 (1877-1896) の出版によってその名を不朽ならしめたが、その *Indian Mythology* (1897) も Mahābhārata 研究者に座右の書となっている。しかし Mahābhārata に関してより重要な貢献は S. Sørensen の手に成る *An Index of the Names in the Mahābhārata* である。彼はしかし先任者 Fausbøll の退官後 7ヶ月間大学教授職に在ったまま長逝し (1903) その上記大著も歿後に出版された (1904)。

S. Sørensen の後を承けたのは D. Andersen (1861-1940) で、1928年まで教授職に在り、Pali 学は更にこの地に定着した。彼は1891年、幾つかの仏教説話を Denmark 語に訳したが、1897年 Fausbøll の Jātaka の Index を作ってその第 7巻として添付した。彼の手になる *A Pali Reader* (1901) はその正確周到なる学風を反映して今なお最良の入門書とされているが、H. Smith (1882-1956) との協力は Fausbøll, Suttanipāta の改訂 (1913), *The Pāli Dhātupāṭha and the Dhātumañjūsā* (1921), 更に後述する V. Trenckner, *A Critical Pali Dictionary* (CPD と以下略称する) 第一冊として見事に開花した。

Andersen 退官後は P. Tuxen (1880-1955) これを継ぎ、1951年まで教授職にあった。彼は E. Windisch (Leipzig), H. Jacobi (Bonn) に師事し、

インドの哲学宗教に関心を示した。著書 *Yoga, A Conspectus of Systematic Yoga Philosophy from Sources* (1911, 1982 再版), 及び *An Indian Primer of Philosophy, or the Tarkabhāṣya of Keśavamiśra* (1914) によってその学風を知り得るが、古 Upaniṣad, Bhagavadgītā, Dhammapada 等インドの古典を多数 Denmark 語に訳している。後年タイに旅行して仏教にも関心を寄せ、中観哲学にも著作がある。⁽³⁾

Tuxen の後は H. Pedersen 門下の言語学者 H. Hendriksen (1913-) が Uppsala より招かれて教授となった。Trenckner 資料に拠る Pāli 不定動詞の研究は数少ない Syntax の名著とされるが、近年は専ら Himachali 研究に専念している。⁽⁴⁾

Hendriksen 退官後 Copenhagen 大学は正規の教授を欠いているが、チェコより移住した I. Fišer (1929-) と E. Strandberg (1941-) が講師に任命されている。前者は久しく CPD, 並びに Pali Tipiṭakam Concordance の仕事に従事していたが、汎くインド文化一般に関心あり,⁽⁵⁾ 現在 J. Gonda, *History of Indian Literature* の *Erotics* の執筆を予定されている。後者は近年 *Modi Documents* 研究によってインド学に新生面を開拓した。⁽⁶⁾

Copenhagen 大学に教職こそ得なかったが、その卓れた業績によって知られる二人の学者に言及する。一人は V. Trenckner (1824-1891), 他は H. Jörgensen (1886-1954) である。前者は *Milindapañha* (1880), *Majjhima-Nikāya* (1888) の校訂者であり、又就中 CPD の生みの親であった。⁽⁷⁾ 生涯を孤児の教育に捧げた Trenckner の偉業は歿後 L. Alsdorf, K. R. Norman 主宰の下に継続され、Copenhagen に事務所を置いて E. Pauly, Ch. Lindtner⁽⁸⁾ 等が編集の実務を担当している。今一人、H. Jörgensen は若くドイツに学び、E. Sieg, A. Grünwedel 等に師事して *Newāri* 研究に新生面を拓いた。彼がその寡黙不遇の生涯を捧げたこの分野は今 B. Kölver, S. Lienhard によって継承発展されている。⁽⁹⁾

以上概観して明らかのように、Denmark のインド学は就中 Pali 研究への貢献により特筆される。Trenckner, Andersen, Hendriksen に次第する Pali 研究の路線が元来 Rask によって敷かれていたのを思う時、天才の後世に影響するところ大なるに今更乍ら驚かされる。⁽¹⁰⁾

Sweden

Sweden のインド学はその歴史に徴する限り、Uppsala を先づ第一に挙げねばならない。既に 1838 年以来この大学に於いて O. F. Tullberg (1802-1853), A. Erdmann (1824-1921), O. A. Danielsson (1852-1933) により

随時 Sanskrit (以下 Skt と略す) が教授されていたが、Skt 及び IE の教授職設立は1893年であった。以後、現在に到るまでその職に在った学者を列挙すれば以下の如くである。K. F. Johansson (1893-1926), J. Charpentier (1927-1935), H. Smith (1936-1946), H. Hendriksen (1947-1951), S. Wikander (1953-1974), Nils Simonsson (1975-)。

初代教授 K. F. Johansson (1860-1926) は Skt 並びに IE の文法、語源研究に多くの業績を残したが、Skt に関しては *Über die altindische Göttin Dhīṣanā und Verwandtes* (1917) が知られている。彼を継いだ J. Charpentier (1884-1935) はその幅広い活動によって知られ、150以上の論稿を著した。その中でも *Die Suparṇasage* (1920), *Uttarādhyayanāsūtra* (1922) が特によく知られている。次の H. Smith (1882-1956) は厳密精確な学風で知られる文献学者で *Saddanīti* の校訂出版 (1928-1956) を始めとして CPD を中心とした Pali 研究、並びに中期インド・アリアン語研究に画期的な業績を残した。既述の Hendriksen の後を襲った S. Wikander (1908-1983) は主として宗教史学の立場よりインド・イラン研究に従事し、*Vāyu* (1941), *Der Arische Männerbund* (1938) の著作のほか比較神話学に貢献した。Wikander の退官後 Oslo より N. Simonsson (1920-) が迎えられた。彼は夙に *Sāmkyakārikā* の Sweden 語訳註を発表したが、その *Indo-tibetische Studien* (I. Die Methoden der tibetischen Übersetzer 1957) は斯分野の古典とされる。⁽¹¹⁾ 門下に Gunilla Gren-Eklund,⁽¹²⁾ R. Walldén⁽¹³⁾ があって目下学生指導に当たっている。尚 Uppsala に一時期講師として教鞭を執った学者に E. Arbman (1922-37), K. Rönnow (1928-43), S. Lindquist (1932-43) がある。E. Arbman (1891-1959) は *Rudra* (1922) の著により知られるが、1937年以後は Stockholm に移った。K. Rönnow (1897-1943) は *Trita Āptya, eine vedische Gottheit I* (1927), 又 S. Lindquist (1895-1943) は *Die Methoden des Yoga* (1932), *Siddhi und Abhiññā* (1935) の著によって知られている。

Stockholm 大学のインド学は、近代インド語学文学研究を趣旨として1967年創設され、初代教授として Austria 生れの S. Lienhard が Kiel より迎えられた。彼は Hindi, Tamil, Newārī 等近代語を駆使して数多くの研究を発表しているが、古典研究にも *Ratirahasya* の独訳 (1960) を始め、Skt, Pāli, Prakrit にわたる多数の論稿がある。近くは J. Gonda の叢書の中に *Kāvya* 文献概説を上梓した。⁽¹⁴⁾ Lienhard の下に C. Suneson, W. L. Smith が講師を勤め、前者は *Śaurikathodaya* の出版と英訳を著わし (1969),⁽¹⁵⁾ *Rājasthānī* 文学に意欲を示し、後者は Bengal 語を講じている。⁽¹⁶⁾ 尚既述の E. Arbman は1937年以後当地の教授として Uppsala より

迎えられたが、彼の在籍したのは宗教史学講座であった。

北海に面した Sweden の西の玄関 Göteborg では、1898年以來 Skt は IE の一環として講じられている。それ以前、しばしば米国に渡った H. Edgren (1840-1903) は Sweden 語で Skt 文法を著し (1883), Śakuntalā, Meghadūta, Mālavikāgnimitra 等を Sweden 語に訳している。1899年以來この地に講筵を張った学者は次下の如くである。E. Lidén (1899-1929), G. Morgenstierne (1930-1937), H. Frisk (1938-1967), G. Liebert (1968-1982), F. Josephson (1983-)。E. Lidén (1862-1930) の Skt に関する著作として *Studien zur altindischen und vergleichenden Sprachgeschichte* を挙げ得る。次の G. Morgenstierne は Oslo に移ったが、彼を継いだ H. Frisk (1900-1984) はギリシャ語語源辞書の著者として知られ、又「エリュトウラー海案内記」(Le périple de la mer Erythrée, 1927) の校訂にも卓れた業績を残した。Frisk の後を襲った G. Liebert (1916-) は初め Lund に教職を有し、その学位論文 -ti- Suffix も Lund より出版されている。近年は凶像学に関心を有している。⁽¹⁷⁾ 門下に C. Wennerberg があり、-man-Suffix に大著をものした。⁽¹⁸⁾ 現在この地に講筵を張っている F. Josephson は Uppsala より迎えられた学者で、就中 Hittite 研究者として令名を馳せている。⁽¹⁹⁾

古都の行いを呈する大学町 Lund でも 1880年代以降 Skt は講ぜられていたが、Skt 及び IE の教授職の創設は 1898年であった。この地位に在った学者に次下の三名を数える。N. Flensburg (1898-1920), H. Petersson (1923-1927), N. Holmer (1950-1969)。N. Flensburg (1855-1926) は寡作の学者であったが、Skt の時制について Sweden 語 (1888), 鼻音現在語幹形成についてドイツ語 (1894) の著作がある。H. Petersson (1881-1927) にはその *Studien zur Fortunatov's Regel* (1911) を始めとする Skt 音韻史の研究があるが、教授職を得て 4年後に他界した。1927-1950の間 Lund は正規の教授を欠いたが、この間は *Recherches sur la valeur des traditions bouddhiques palie et non-palie* (1913) や Udbhāṭa の詩論の研究 (1906) で知られる E. Tuneld (1877-1947), Nirukta の研究に貢献した H. Sköld (1886-1930), 既述の K. Rönnow, H. Smith もこの地に教鞭を執った。しかし 1969年以後この教授職は一般言語学に衣替えることとなり、現在はこの地で Skt は講じられていない。この他 Lund には南インド研究者として知られる C. G. Diehl が健在であり、⁽²⁰⁾ 曾って *Deliver us from evil* (1946) を公刊した S. Rodhe も南端の都市 Malmö に住んでいる。

Finland

Sktがこの国に初めて講ぜられたのは1835年であった。即ちこの年に、もとアラビヤ語の専門家であったI. U. Wallenius (1793-1874)はHelsinki大学に於いて始めてSktを教授した。門下にH. Kellgren (1822-1856)あり、ドイツ、フランスに到ってF. Bopp, H. Brockhaus, E. Burnoufに師事し、後Londonに在ってManusmṛtiとその諸註訳の批判的校訂出版を企てたが、1854年Helsinkiに教授職を得て間もなく他界した。その後約20年、1875年にSkt及びIEの教授職についての学者はO. Donner(1835-1909)であった。彼はもとインドとフィンランドの宇宙開闢論を論じて博士号をとり(1863)、後BerlinのA. Weberに師事してVeda祭式を修めた。そのPiṇḍapitṛyajñaは1870年に公刊されている。Donnerの下に1891年以来講師を務めたJ. N. Reuter (1863-1937)はJenaのB. Delbrückの下でSkt. IEを修め、後Berlinに於いてSktの名詞合成語のアクセントについて学位論文をまとめた(1891)。更に1904年*The Śrautasūtra of Drāhyāyana with the commentary of Dhanvin*を公けにし、この地のVeda研究、就中Sāmaveda祭式文献研究の端緒を開いた。彼は又C. G. E. Mannerheim請来の中央アジア仏典断片の校訂、トカラ語研究にも貢献した。

Reuterの後、Skt及びIEの教授となった(1958)のは、もとH. Smith門下で、西洋古典語、蒙古語を能くしたP. Aalto (1917-)である。彼には梵文仏典、特にPañcarakṣāとそのチベット、トルコ、蒙古語訳の研究がある。⁽²¹⁾

Aalto門下のAsko ParpolaはReuterのSāmaveda研究の学統を継ぎLātyāyana及びDrāhyāyana系Śrautasūtraの研究を公けにし、ひきつづいてJaiminiyaśrautasūtraの校訂に従事している。近時南インドに残るVeda祭式の伝承を実地踏査して研究に新生面を拓き、傍ら実弟のSimo Parpola (Assyriology)と結んでメソポタミヤとハラッパーの関係を論じ、Indus文字解読に熱意を示している。⁽²²⁾彼の下にH. Halén (Altaic Studies), K. Karttunen (Indo-Greek), B. Tikkanen (Skt. Absolute)あり、この地は東アジア、南アジア研究に活況を呈している。尚、古都Turkuには古くY. M. Biese (1903-)あり、ヴェーダ語研究に貢献したが、これとは別に印度哲学研究にS. Krohn, U. Tähtinenの名を挙げ得る。後者はahimsā(不殺生、非暴力)や価値観念について著書を公けにしているが、Helsinki在住学者のように梵文原典を駆使して問題を論ずる性質のものではない。

Norway

Norwayはかの有名なCh. Lassen (1800-1876)の故国である。彼は古

都 Bergen に生れたが、夙に 2 年間 London, Paris に在り、A. W. Schlegel の Rāmāyana 校訂を助け、1830 年以来 Bonn 大学教授となった。その学位論文は Punjab の歴史と地理に関するものであったが、その修めるところは凡そインド学の全域にわたり、Sāmkhyakārikā, Gitagovinda, Hitopadeśa 等を或いは校訂し又或いは翻訳した。その 4 巻 4500 頁に及ぶ *Indische Altertumskunde* (1858-1874) は当時のインド学の全知識を結集した壮挙で、現在も尚その価値を失わない。

しかし Oslo 大学に始めて Skt と IE を開講したのは A. Torp (1853-1916) で、彼は 1894 年この地に教授職を得た。その門下に有名な S. Konow (1867-1948) があり、彼は夙に Halle に到って R. Pischel の下にインド学を修め (1893)、Sāmavidhānabrāhmaṇa の翻訳研究によって学位を得た。その後 3 年間英国に在って G. A. Grierson の *Linguistic Survey of India* を補け、1906-1908 の間はインドに在って刻文研究に従事した。1910 年 Oslo 大学の教授に任ぜられたが、1914-1919 の 5 年間 Hamburg の教授職に在ったこともある。その修めるところは刻文学、歴史学、梵文学、中央アジア言語学にわたり、幅広く印度学に不朽の業績を残した。

Konow の後にはその女婿 G. Morgenstierne (1892-1978) が Sweden の Göteborg より迎えられた (1907)。彼は初期に Mṛcchakatika と Bhāsa の Cārudatta との批判的比較研究を発表した (1921) が、Afghanistan, India, Persia に研究旅行を重ね、厳密周到な方法によってインド・イラン辺境言語に卓れた業績を残した。インド・イラン語について、アリアン語第三派として Kafiri 語を設定したのは彼の功績である。

1963 年 Morgenstierne 退官するや Uppsala の講師であった N. Simonsson が教授として迎えられたが、1974 年彼は再び Uppsala に教授職を得て Sweden に帰った。Simonsson の後には G. von Simson が迎えられ、その下に K. Kristiansen, F. Thiesen が講師として印度の現代語を講じている。von Simson は Göttingen の E. Waldschmidt 門下で、夙に中央アジア梵文仏典研究に卓れた論稿を発表しているが、Mahābhārata の神話解釈に独自の視点を有している。⁽²³⁾ 尚、Paris は M. Biarreau 門下で Naiṣkarmyasiddhi, Upadeśasāhasrī の研究で知られる G. Maximilien も一時期 Oslo に在り、又 N. Simonsson 門下の俊秀 P. Kvaerne はこの地に宗教史学の教授としてチベット学を講じている。

この他、北欧に於いて、インド学を含む学術的に重要な東洋学の定期刊行物として次下のものがある。

Acta Orientalia (Copenhagen) 1922-

Orientalia Suecana (Uppsala) 1952-

Studia Orientalia (Helsinki) 1923-

尚、現在既に廃刊となつてはいるが、往昔権威ある学術誌として知られ、今尚参照に値する重要な論文を掲せているものに次の二つがある。

Le Monde Oriental (Uppsala, 1906-1941: 35 vols.)

Archives d'Etudes Orientales (Uppsala and Stockholm 1910-1920: 17 vols.)

註

- (1) *Catalogue of Ceylonese Manuscripts*, by C. E. Godakumbura (1980)
Catalogue of Cambodian and Burmese Pali Manuscripts, by C. E. Godakumbura, U. Tin Lwin, H. Bechert and H. Braun (1983) (The Royal Library, Copenhagen).
- (2) E. Strandberg, "N. L. Westergaard 1815-1878," *Acta Orientalia* 39 1978, pp. 5-22.
- (3) 湯山明 "西洋人の仏教研究史。" 「講座大乘仏教」10 (春秋社 1985) pp. 251-252.
- (4) H. Hendriksen, *Syntax of the Infinite Verb-forms of Pali* (Copenhagen 1944)
——— : *Untersuchungen über die Bedeutung des Hethitischen für die Laryngaltheorie* (Copenhagen 1941)
——— : *Himachali Studies* I (Vocabularies) (1976) II (Text) (1979) (Copenhagen)
- (5) I. Fišer, *Indian Erotics of the Oldest Period* (Praha 1966)
- (6) E. Strandberg, *The Moḍi Documents from Tanjore in Danish Collections* (Wiesbaden 1983)
- (7) D. Andersen, "A Pioneer in Pali Lexicography," *CPD* (1924), pp. iii-viii.
- (8) Ch. Lindtner, *Nāgārjunas Filosofiske Vaerker* (Copenhagen 1982)
——— : *Nāgārjuniana, Studies in the Writings and Philosophy of Nāgārjuna* (Copenhagen 1982)
- (9) E. Pauly, "Hans Jörgensen: A Pioneer in Newāri Studies," *Indologica Taurinensia* 10, 1982, pp. 185-192.
- (10) この他 Copenhagen 大学には Iranist J. P. Asmussen (1928-) が健在であり、Tangut 学者 E. Grinstead も CPD 事務局に在り、日本語に堪能

- な Ch. Rohde 女史も王立図書館と CINA に於いて活躍している。
- (11) 近時刊行された *Kalyānāmitrārāgaṇam, Essays in Honour of Nils Simonsson*, ed. by Eivind Kahrs (Oslo 1986), pp. ix-xiii にその著述目録がみえる。
- (12) Gunilla Gren-Eklund, *A Study of Nominal Sentences in the Oldest Upaniṣads* (Uppsala 1978)
- (13) R. Walldén, *Studies in Dravidian Phonology and Vocabulary* (Uppsala 1982)
- (14) S. Lienhard, *Kokkoka, Ratirahasya, Geheimnisse der altindischen Liebeskunst* (Stuttgart 1960)
 ——— : *Tempusgebrauch und Aktionsartenbildung in der modernen Hindi* (Stockholm 1961)
 ——— : *Die Legende vom Prinzen Viśvantara* (Berlin 1980)
 ——— : *A History of Classical Poetry, Sanskrit-Pali-Prakrit* (Wiesbaden 1984)
- (15) Carl Suneson, *Śaurikathodaya, A Yamaka Poem by Vāsudeva* (second revised edition, Stockholm, 1986)
- (16) W. L. Smith, *The One-eyed Goddess, A Study of the Manasā Maṅgal* (Stockholm 1980)
- (17) G. Liebert, *Das Nominalsuffix -ti- im Altindischen* (Lund 1945)
 ——— : *Iconographic Dictionary of the Indian Religions, Hinduism-Buddhism-Jainism* (Leiden 1976)
- (18) C. Wennerberg, *Das altindischen Nominalsuffixe -man- und -iman- in historisch-komparativer Beleuchtung* (Göteborg 1981)
- (19) F. Josephson, *The Function of the Sentence Particles in Old and Middle Hittite* (Uppsala 1972)
- (20) C. G. Diehl, *Instrument and Purpose, Studies on Rites and Rituals in South India* (Lund 1956)
- (21) P. Aalto, *Oriental Studies in Finland 1828-1918* (Helsinki 1971)
- (22) A. Parpola, *The Śrautasūtras of Lāṭyāyana and Drāhyāyana and their commentaries* (Helsinki 1969)
 A. Parpola and K. Koskenniemi, *Corpus of Texts in the Indus Script* (Helsinki 1979)
 ——— : *A Concordance to the Texts in the Indus Script* (Helsinki 1982)
- (23) G. von Simson, *Zur Diktion einiger Lehrtexts des buddhistischen*

Sanskritkanons (München 1965)

————— : *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texts aus den Turfan-Funden* (E. Waldschmidt, H. Bechert) I-IV (Göttingen 1975-1981)

————— : “Die Einschaltung der Bhagavadgītā im Bhīṣmaparvan des Mahābhārata, *Indo-Iranian Journal* 11, 1969, pp. 159-175.